

一次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

学校や仕事、家庭など、僕たちは日常生活のさまざまな場面で、日々信念の対立に①ソウグウする。「俺の考えは絶対に正しい、お前は絶対にまちがっている!」……そんなことを、僕たちはしばしば口にしてしまうことがある。

でも、この世に②絶対、正しい信念なんてものはない。

そう、僕たちの信念は、実は何らかの欲望や関心によって編み上げられたものなのだ。

たとえば、学校は子どもたちをびしっと統率しなければならぬと考える親や教師がいる。その一方で、学校は子どもたち一人ひとりの自由や自主性をできるだけ尊重しなければならぬと考える人たちがいる。

③異なる信念を持つ両者は、時に激しく対立することがある。

でも、この信念の次元で対立を続けているかぎり、両者が理解し合うことはひどくむずかしい。「自分こそが正しい、お前はまちがっている」。そんな信念のぶつけ合いに、多くの場合終始することになるだろう。

そんな時に重要なのは、どちらの信念が絶対に正しいかと考えるのをまずやめることだ。そしてお互いの信念が、いったいどのような欲望や関心から編み上げられたのか、互いに吟味することだ。

④、集団統率をよしとする教師は、かつて学級崩壊に苦しんで、そんな経験はもう二度とごめんだと思っているのかもしれない。だから統率力を⑤ハツキして、子どもたちをまとめ上げ、校長や保護者たちからその指導力を認められたいという欲望を持っているのかもしれない。

⑥、子どもたちの自由や自主性を尊重すべしと考える人は、子どもの頃集団統率的なクラスになじめず、孤独な思いを抱えた経験があるのかもしれない。だからそんな⑦ソカイカン、今の子どもたちに味わわせたくないという欲望があるのかもしれない。

もつとも、本当に学級崩壊の「経験」が集団統率への欲望を抱かせたのか、あるいは、集団統率の苦しい「経験」が自由尊重の

欲望を生み出したのか、その真相は究極的には分からない。過去の経験と僕たちの欲望との因果関係は、ゲンミツには「たしかめ不可能」なものなのだ。

でも、集団統率の欲望であれ、自由尊重の欲望であれ、僕たちがそうした欲望を抱いているのだとするならば、その欲望自体を疑うことはできない。

ここで重要なのは、僕たちの信念は実は欲望の別名だということだ。

信念対立の現場において、僕たちはそのことを十分に理解し合う必要がある。そうすれば、「なるほどね、あなたがそういう欲望を持っているということについては、まあ分からなくもないよ」と、⑧ お互いに一定の理解を示し合えるようになるだろう。

信念の次元で議論をし合うかぎり、僕たちは互いに一步も引けなくなることがある。でも欲望の次元で対話をすれば、僕らは相手の欲望を理解しようとすることができるようになる。少なくとも、その可能性を開くことができるようになる。

もちろん、だからといってすぐにお互い共感し合ったり納得し合えたりするわけじゃないだろう。でもその理解への意志は、対立を乗り越えるためのささやかな一歩になるはずなのだ。

⑨ そこで次に重要なのは、お互いのそうした欲望や関心が、本当に⑩ 妥当かどうか吟味することだ。

「自分の統率力を認めさせたい」という欲望は、本当に子どもたちのためになっているといえるのか？ 「孤独を感じさせたくない」という思いは、本当は独りよがりな欲望にすぎないんじゃないか？ といった具合だ。

そうやってお互いの欲望の妥当性をたしかめ合いながら、僕たちは、徐々にお互いが納得し合える「共通関心」へと思考を向かわせる必要がある。独りよがりな欲望や関心じゃなく、どちらも共有できる、もっと深い欲望や関心を考え合うのだ。

たとえば、自由尊重派の教師のみならず、集団統率派の教師も、子どもたちにはゆくゆくは自由に、つまり生きたいように生きられるようになってほしいという関心なら、きっと共有できるにちがいない。

でもだからといって、子どもたちのわがままな自由を、今教室でそのまま認めるわけにはいかない。そのような関心もまた、両者は共有できるにちがいない。

僕たちが自由に生きるためには、他者の自由もまた認めることができなければならないのだった。哲学ではこれを「自由の相互承認」の原理と呼んでいる。

⑩この原理の重要性を、「両者はきつと『共通関心』として持つことができるはずだ。

とすれば、僕たちは「集団統率か、自由尊重か？」といった対立を続けるのではなく、子どもたちのゆくゆくの自由と、その「相互承認」を育むという「共通関心」を、どうすれば実現することができるのか、共に考えていけるようになる。

信念対立は、その時対立から協同へとひっくり返るのだ。

もちろん、実際の信念対立の現場では、とりわけ感情が^⑪シヤマをして、事はそう簡単には進まないだろう。でも、もし僕たちが本気で対立を乗り越えたいと思うなら、こんなふうにお互いの欲望や関心の次元にまでさかのぼり、その上で、お互いが納得できる共通関心と、それをかなえるためのよりよい第三のアイデアを見出し合っていくべきなのだ。

以上述べてきたことは、「超ディベート」(共通了解志向型対話)の具体的な方法でもある。

いわゆる競技ディベートのように、肯定側と否定側、どちらが説得力があったかを競うのではなく、お互いに納得できる「第三のアイデア」を見出し合う対話、それが超ディベートだ。

この「第三のアイデア」は、お互いの欲望の次元にまで思考をめぐらせることで、共に見出し合うことができるようになる。そこで最後に、そのための思考のステップを改めてまとめておくことにしよう。

- 1 対立する意見の底にある、それぞれの「^⑬」を自覚的にさかのぼり明らかにする。
- 2 お互いに納得できる「^⑭」を見出す。
- 3 この「^⑭」を満たしうる、建設的な「^⑮」を考え合う。

誤解のないよういっておくと、これは「妥協点」を見出し合う議論というわけじゃない。

妥協は、お互いがお互いに少しずつ折れることで、はじめに求めていたレベルより低い地点での合意を得ることだ。

それに対して「共通了解志向型対話」は、文字通り、どちらもが納得できるよりよい「共通了解」「第三のアイデア」を、共に

見出し合うことをめざすものなのだ。

信念を、ただ^⑩ソボクに主張し合うのではない。その信念の底にある欲望の次元にまでさかのぼれば、僕たちはきっと、対立を乗り越え、そんな「共通了解」を力強く見出し合っているはずなのだ。

『はじめての哲学的思考』 苫野一徳^{とまのいっどく}

問一 傍線部①・⑤・⑦・⑫・⑯の片仮名を漢字に直しなさい。

問二 傍線部②「絶対に」が係っている単語を抜き出しなさい。

問三 傍線部③「異なる信念を持つ両者は、時に激しく対立することがある」とありますが、なぜ両者は激しく対立することがあるのですか。その理由を三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問四 空欄部④・⑥に当てはまる言葉を、次のア～オのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他方 イ むしろ ウ もし エ たとえば オ なぜなら

問五 傍線部⑧「お互いに一定の理解を示し合えるようになるだろう」とありますが、信念をぶつけ合っている両者が、どうすることで、一定の理解を示し合えるようになるのですか。文中の言葉を使って四十文字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問六 傍線部⑨「そこで次に重要なのは」とありますが、一つ目に重要なことを述べている段落の最初の五字を抜き出しなさい。
(句読点は字数に入れません。)

問七 傍線部⑩「妥当」の意味として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 根拠 イ 真実 ウ 適切 エ 明確 オ 常識

問八 傍線部⑩「この原理の重要性を、両者はきつと『共通関心』として持つことができるはずだ」とありますが、これを説明した次の文章の空欄部A～Dに当てはまる語句を書きなさい。(C・Dはそれぞれ漢字二文字で答えること。)

どちらの教師も、

という思いや、

という考えは共有できるにちがいない。すなわち、人間が社会で、自由に安心して生きていくために、お互いを

で

な存在として認め合うことの重要性を、共通の関心として持つことができるということ。

問九 空欄部⑬～⑮に当てはまる語句を、⑬・⑭は五字以内、⑮は七字以内で文中からそれぞれ抜き出さない。
(句読点・記号は字数に入れません。)

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈山田ヒロシは、大阪に住む、高校受験が目前に迫った中学三年生。同級生の野末のずえよしみ義美は、女子ソフトボール部の副キャプテンで、ヒロシは以前から彼女のことを気になっていたが、三年で同じクラスになるまで話しかけたこともなかった。〉

一月に入ってから、学校では、六時間目から塾までの間に補習が実施されるようになった。出席は自由で、ヒロシは数学が飛び抜けてだめだったので、最初は数学だけ出ていたのだが、そのうち、家にいるのもつらくなってきて、そんなに心配はしていない教科の補習にも出るようになった。塾では、比較的勉強ができて、偏差値の高い高校を目指している生徒に囲まれているので、焦りでおかしくなりそうな部分もあったのに対して、学校で補習に出ている連中は、なんだかんだでなんとかなる、というような牧歌的な①フレイキで受験をとらえている者が多く、関わっていると少し安心した。彼らは彼らでいいやつだったりおもしろかったりするので、べつに受験で失敗しても人生真つ暗というわけではない、と思えた。

②野末もそういう生徒の一人だった。楽天的というか脳天気というか、一応受験はいやだし自信もないし③クチは言うのだが、話しているうちに、最後には、まあ三月の後期日程まで粘れば、どこか納得のいくところに滑り込めるだろう、という結論に必ず達する。

「もしぜんぜん行きたくないところに入ることになっても、大学でやり直せるように高校一年から予備校通えばいいし」

「大学行きたいんや?」

「それはまだわからん。行きたいと思わんねやったらそれまでやわ」

「あかんとこに行って、それで三年になって突然いい大学行きたくなって勉強が間に合わんかったら?」

「どやろ、浪人するか、そのまま行けるとこ行く。そこできてることを探す」

野末と話していると、だいたい物事がどうとでもなりそうな気がする。何も考えていなさそうで、でもそういうわけでもなく、

だめだった時にも、そこでどうすればいいのかについて頭を働かせている。何を訊いても、はぐらかしたりせずになんでも答えるので、だんだんおもしろくなってきた。将来何になりたいん？ と質問すると、野末は、体育の先生、と言った。④ソフトボールの選手やなくて？ と訊き返すと、自分は才能ないから、と野末はきっぱり言った。球筋を読む能力に欠け、ボールが飛んできたら、どっちに動けばいいのかが半秒迷うらしい。

「わからんけど、体育の先生にはなれそうやな」

「普通に会社員になって、休みの日にソフトボール教える人でもいいよ」

野末も小学生の時に、そういう人に世話になったのだという。⑤お返しに野末は、山田はあんた何になりたいん？ 画家？ と決め付けるように言ってきたので、ヒロシは一瞬怯んで、まあ、そういう関係の、仕事、とだんだん小さくなる声で答えた。野末は、なれるやろ、なったらええやん、とまったく考えた様子もなく返して、話に飽きたのか、配られてきた英語のプリントに戻った。

補習に出るのには、野末と話せるから、という理由もあったけれども、本当のところ、話したいことが話せているのかについては疑問だった。しゃべっているとおもしろいし、勉強や将来について考えることにまったく役に立たないわけでもないのだが、

⑥何か言い出せていないことがあるとヒロシは自覚していた。

注 大土居とは、文化祭の次の週にあった模試の帰りに会った時以来、ほとんど話らしい話はしていない。少しの間野末の家に避難していた大土居とその妹は、義父が家を出たので、自宅に帰ることにした、と言っていた。ヒロシは、遠くからだが注意深く、大土居の様子を観察しているつもりだったが、それ以降も目立った変化は見られなかった。文化祭の前と同じような感じだった。ただ、内情を知っているからか、ほっとしているというか、思いつめたような顔付きは、見かけることが少なくなったように思う。大土居と仲の良い野末なら、大土居についてはなんでも知っているように思われたけれども、あえて様子を訊くのもなんだか具合が悪かった。ヒロシは、自分が他人から知った口をきかれない分、他人にもそう振る舞わなければいけないと強固に思っていて、たとえば自分が野末に「大土居最近どうなん？」などと尋ねることは、すでに知った口の範疇であると見なしていた。

何が、どうなん？ やねん、とヒロシは、やってもいない自分の行動に対して嫌悪感けんおを持つ。完全に無駄な感情なのだが、日に一度、塾の帰りなどに、野末に大土居のことを訊いてみたい誘惑に駆られるたび、自分をそう戒める。

「そういうやき、私が補習出て、山田に数学教えてんねんって言ったら、さわが、山田どうなんって訊いてたで」そう思い出したように言いながら、野末がばつと顔を上げてこちらを見たので、ヒロシはオドロク。「どうなん？」

「いや、何も……」

「受験うまくいったんの？」

今更突拍子もないことを訊いてくるので、ヒロシは、私立は絶対受かりそうところを受けて、公立の前期はちよつと無理めなところを受けて、公立の後期に本命のところを受ける、そこに落ちたら、最初の私立に受かってても、まだ募集してる私立でもっと良さそうところを探すかも、とむやみに詳細に答えてしまう。野末は、いろいろ考えてんねんなーあんだー、参考にするわー、と冷やかすようににやにやするので、もつと適当な答えでよかったのかもしれない、と後悔する。そして野末は、それ以上は何も訊いてこない。

大土居は自分の何を訊きたかったのか、とヒロシは思いながら、先ほど解いた連立方程式の計算問題の答え合わせをする。自信のあるものは正解していて、そうでないものは間違い、というわかりやすい結果が出ていて、何も前進していない感じに軽く失望する。できないことをやるより、比較的できる教科をより勉強したほうがいいようにも思えるのだが、同点の受験生とボーダーラインにいた場合、極端な弱点がある自分のほうが落とされる気もするので、しぶしぶやってもわからない数学に手を出して、やはりわからない、という悪循環を繰り返している。

補習の時間が終わる五分前になると、野末は、疲れた、めつき疲れた、とひとりごとを言いながら、教科書やプリント類をリュックにしまい始める。ヒロシが、大土居はどうやって勉強してんの？ とつねづね疑問に思っていたことを言うと、十二月から塾行ってるよ、教科ごとに行くやつ、と野末は首を回しながら答える。十二月から行って志望校落とさんと間に合うん？ とヒロシが言い募ると、そやからめっちゃ勉強してるやろ、と野末はリュックのファスナーを閉める。

「九州の高専受けるからなあ」

「くわ」

「高校からおかんの実家で暮らすんやって」

野末は目を眇めて、微かに否定的な表情でヒロシを見遣る。他人の母親への言及だが、野末の「おかん」という言い方には棘がある。やっぱりいろいろな内情を知っているのだろう。

「^⑨もつたいないわ、そう思わん？ 山田」

補習担当の教師の、じゃあもうそろそろ、という声と共に、野末は立ち上がってリュックを肩に引っ掛ける。

「何が？」

「だってさ、せつかく仲良くなったのに、三年間とか期限付けられてその後ばらばらにされるとかさ。中学生やからって」

「まあな」

当たり前のことなのだが、改めて疑問を呈されると、不公平な感じもする。

「家族とか会社は、卒業するってことはないのに」

野末は、ほな、と一方的に言っつて、さっさと教室を後にする。ヒロシと野末は、いつもたまたまという態で補習で一緒になるため、その前後の過ごし方には一切保証がないのだった。低レベルな勉強の話や雑談はするが、共に校門を出ることはない。そこはなぜか^⑩ゲンミツに決まっていた。

『エヴリシング・フロウズ』津村記久子

注 大土居紗和・・・ヒロシたちの同級生で、女子ソフトボール部のキャプテン。野末の親友。野末やヒロシたちに支えら

れながら、虐待行為から妹を守るため、義父に立ち向かっている。

問一 傍線部①・③・⑦・⑧・⑩の片仮名は漢字に、漢字は平仮名に直しなさい。

問二 傍線部②「野末もそういう生徒の一人だった」について、次の問いに答えなさい。

- (1) 「そういう生徒」とはどんな生徒なのかを、文中の言葉を使って五十文字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)
- (2) 野末の人柄を最も的確に述べている一文を文中から六十文字以内で抜き出し、最初と最後のそれぞれ五字を書きなさい。

(句読点は字数に入れます。)

問三 傍線部④「ソフトボールの選手やなくて？」と訊き返したヒロシの心情を六十五文字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れます。)

問四 傍線部⑤「お返しに野末は、山田はあんた何になりたいん？ 画家？ と決め付けるように言ってきたので、ヒロシは一瞬怯んで、まあ、そういう関係の、仕事、とだんだん小さくなる声で答えた」とありますが、ここから読み取れる野末とヒロシの心情をそれぞれ書きなさい。

問五 傍線部⑥「何か言い出せていないことがあるとヒロシは自覚していた」とありますが、ヒロシが野末に言いたかったが言えていないことに該当する言葉を、文中から二つ抜き出しなさい。

問六 傍線部⑨「もったいないわ、そう思わん？ 山田」とありますが、野末が山田に言いたいことを六十文字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れます。)

問七

本文中に描かれているヒロシの様子に合うものを、次のア〜カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 高校受験に向けて、いくら勉強しても成績が伸びないうえに、将来の進むべき道が見えてこないので行き詰まりを感じ、絶望的な気持ちに陥っている。

イ 冷静に自分を見つめて、将来について考えている野末のことをうらやましいとは思いますが、楽天的すぎるように感じて少し距離を置こうかとも思っている。

ウ 自分の美術の才能を認めてくれるものは一人もいないので、本心では美術の道に進みたいと思っているが、決心して行動を起こす勇気を持ってずにいる。

エ 大土居のことが気がかりで、ずっと頭から離れないが、家庭の事情をよく知りもしない自分が、軽々しく口出しするべきことではないと自制している。

オ 大土居の、妹を守ろうとする勇氣には心から感心しているが、自分には親に逆らってまで、妹と家を出るなどということには到底できないと思っている。

カ 以前から好感を持っている野末のことが気になっているが、今よりもっと親しくなろうと、野末に対して自分から積極的に行動を起こしたりはしない。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

ある人いはく、人の君となれるものは、つたなきものなりとも嫌ふべからず。文にいはく、

山はちひさき土くれをゆづらず、この①ゆゑに②ことをなす

海は細き流れをいとはず、このゆゑに③ことをなす

といへり。

また明王めいおうの人を捨てたまはぬこと、車を造る工たくみの、材を余さざるにたとふ。④曲れるをも、短きをも用ゐるところなり。また人

の食物を嫌ふことあれば、その身必ず瘦すともいへり。

過度に賞を与えすぎるのもいけない、

A そうじて、⑤大人は賤しきを嫌ふまじと見えたり。 B およそ、⑥いとほしければとて、あやまりて賞をもすぎさず、にくけれ

ばとて、みだりがはしく刑をも加へずして、あまねく均ひとしき恵を施すべしとなり。 C また人に一度の咎とがあればとて、重き罪を行ふ

こと、よく思慮あるべし。 D 注 ⑦ 騏驎きりんといふ賢き獣けだもの、おのづから一躡いっつちのあやまりなきにあらず。⑦人とても、いかでかその理ことわりを

はなれむ。

しかれば文にいへるがごとく、

少過せつわをゆるして、賢才を見るべし

となり。

『十訓抄』

注 騏驎・・・一日千里を走る名馬のこと。

問一 傍線部①「ゆる」・⑥「いとほしけれ」を現代仮名遣いに改めなさい。

問二 空欄部②・③に当てはまる語として最も適当なものを、次のア～カのうちからそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。

ア 浅き イ 堅き ウ 狭き エ 高き オ 低き カ 深き

問三 傍線部④「曲れるをも、短きをも用ゐるところなり」の意味を、「車を造る工は」に続くように、言葉を補って説明しなさい。

問四 傍線部⑤「大人」の意味として最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身分や官位の高い人 イ 優れた技を持つ人 ウ 一人前に成長した人 エ きわめて体の大きい人
オ 徳の高い立派な人

問五 傍線部⑦「人とても、いかでかその理をはなれむ」について、次の問いに答えなさい。

(1) 「その」の指示内容を含む一文を、本文中のA～Dのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

(2) 筆者はどのようなことを言いたいのですか。解答欄に合うように二十字以内で書きなさい。

(句読点は字数に入れません。)

問六 立派な君主の在り方として、筆者の主張と合わないものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 小さな過失は見逃し許し、優れた才能に目を注ぐべきである。

イ 恩恵はその人の能力を見極め、働きに応じて施すべきである。

ウ 気に入らないからといって、むやみに刑罰を加えるのはよくない。

エ 身分や地位が低いからといって、その人を嫌ってはいけない。

オ かわいいからといって、やたら褒美を与えるのはよくない。